■選歌ルーム■

二月の選歌ルーム

佐佐木朋子

原ナオ作。「心の花」誌上では、投稿する八首にタイトルはつけないことになっている。付けなくても八首がまとまっていれば、読み手には充分理解されるはずである。わたしは一首独立した八首が並ぶよりも、八首で一つのテーマが見えてくるような作品を毎月取りあげているつもりである。最近の原作品は、言いたいことが沢山あるらしく、一首一首が充実している。胸中にはためらいや反省が鬱勃と湧いてくるのだが、それらに惑わされることなく前を向いて物事に対処していく印象がある。

家族の関係に劇的な展開があるわけではないのだが、責任を持とうとする作者の姿がどの一首にも見えている。

その責任感は、作者の本質と思われる優しさを邪魔ものにしているのではないかとさえ思えるほどだ。状況は常に変化するから、平和な時もあれば軋轢もある。深呼吸しながら、方向転換しながら、過ごしていって欲しい。

平田一哉作。原作とは違って、人との関係性を払拭したような作品である。ペパーミントや、果汁が迸る梨を一首に取りいれる表現が自然で、作者のしなやかな感性を推測させる。心中の憂いを知り、自然と対峙することで解放することができるのも、そうした表現で収めたのではなく、作者に自然への信頼が深くあるからである。六首目の百日紅の花は、自らを投影しているのだろうが、結論めいた事象を語るのはまだ早いだろう。

長谷川静枝作。長谷川さんと同世代の方達なら、今回の一連に共通の記憶、感慨を呼び覚まされるのではないだろうか。作者個人に特有の記憶、体験ではないが、このように淡々と語ることは、作者の個性にしかできないだろう。六首目の水玉のワンピースと革靴は正装に近かったのだろう。子供心に晴れがましい日だったに違いない。

増田満美子作。作者の水の歌はなかなか面白い。発見がある。この独自の感覚をさらに展開させていってほしい。

女流のうた

晋樹隆彦